

われているものをアフリカに紹介しました。私は長いこと同じように、仏さまのおはたらきに気づくには共同体が必要だと感じてきました。その気づきは、自分自身のために自分たちの行動を通して得るものではなく、私たちの周りのすべての人々の支えと仏の教えによって達成されるものです。太陽と雨の存在から共に仏法を学ぶ友人、見ず知らずの人や私たちの命を支えてくれている全ての生き物に至るまで、すべてのご縁を通して仏さまのおはたらきに気づかされるのです。

自己を主張する視点から離れ、私たちの人生や悟りへの道の中に存在し続ける他人の役割にまで気が付くようになると、ころから感謝の気持ちが高まります。浄土真宗では、「南無阿弥陀仏」のお念仏によって感謝の気持ちを表します。

「仏様、無限の知恵と慈悲をありがとうございます」と。振り返ってみると、失敗そのものもご縁として謙虚さや感謝、慈悲そして知恵を知らしめてくれるきっかけとなっていることに気が付きます。しかし、自分の失敗や無力さんを受け入れることができなければ、それらの気づきは困難なものになってしまうのです。



失敗から気づかされること

ウィルソン・ジェフ

ここ数年カナダとアメリカの選挙戦を観ていますが、どれだけの候補者が自身の誤った過去の言葉を軌道修正しなければならないのか考えるようになりました。このような人達は普段の仕事や生活の中でもいます。彼らは対立すると相手が完全に悪いと決めつけ、完璧でないものは認めようとしません。これらの言動はいついかなるコストを伴おうとも、我を押し通し護ることを欲するところからくるものです。

かくいう私もこのような行動を取ることがあります。我のみを護ってしまうことは人間の習性なのでしょう。但し、真実として、私はこれまで成功からよりも失敗から学んだことが圧倒的に多いのです。浄土真宗の教えによると、失敗をしてしまったり不完全であることはそれらを恐れ失望し避けたり隠したりすること（私の様な未熟者の行動の典型なのですが）よりも良いことであるとされております。私の様な者が進歩するためには、自己陶酔的に成功を追い求めることから離れ、自分が何者であるのかを理解する必要があります。内省し、自身の限界を知り、自身や他人に苦しみを持ち込んでいる様々な経路を見つけ出すことは、とても謙虚な過程です。そして、その過程は自身の過信を気づかせてくれ、自己中心の我を必死に護るほどの価値はないものだと認識することを手助けしてくれます。

自分が不完全であることを本当に理解できたなら、間違いに対し謝り責任を受け入れることははるかに簡単になります（簡単であるとは言っておりません）。自身が無知な存在であることを理解すれば、間違いの積み重ねがあなたをつくっていることを、仏ではなくあなた自身が受け入れることができます。自分に対して懐疑的になれると視界が広がってきます。私たちは何を探しているのでしょうか？幸いなことに我々だけで探す必要はありません。むしろ不可能なのですから。

それは悪いことではなく、むしろ救いなのです。自分たちだけでは失敗してしまったときは、他の人たちとも一緒に歩きながら彼らに助けを求める術を見つけることが出来ます。浄土教では「他力」に依って仏法を追求していきます。私たちは「他力」を「他の力」と翻訳し、無限の慈悲を持つ阿弥陀仏の化身としての自力を越える力が我々を絶えず支え、解放に向けて引き上げてくれます。

1990年代に、ヒラリー・クリントン氏は子育てには共同体が必要だと米国で行

いいえ、違います。浄土真宗では、南無阿彌陀仏のお念仏に遇わせていただいたものは、阿彌陀如来の浄土へ生まれてゆき仏と成らせてもらうのです。

そして、私たちが「南無阿彌陀仏。南無阿彌陀仏。」と口からお念仏がこぼれるとき、そのお念仏を私たちに残し、阿彌陀如来のおはたらきに気づかせてくれた仏に成られた大切な人と出遇うことができるのです。

前出しました前門主様の言葉、もちろん、この世で会えなくなった悲しみは、深く大きいのです。けれども、(親鸞聖人は)念仏の仲間が迷いの世界に沈んでいくのではなく、仏さまの世界に生まれてゆかれたという意味では、ここに自然と湧き上がってくる悲しみは、なかにありながらも、よろこぶべきものだということ、を、「めでたきこと」という言葉で表されたのです。

必ずや浄土へ生まれさせると願いを建て、成就された阿彌陀如来のおはたらきに掌を合わせ今後共にお念仏の道を歩ませていただきますよう。

合掌

駐在僧侶 大内祐真

2017年度 新年のご挨拶について

毎年、佛心の新年号に希望者の名前を記載させていただいてる“新年のご挨拶”。今年も2017年1月8日に発刊される次号で“新年のご挨拶”としての特別ページをこの佛心に掲載させていただきます。

その特別ページに名前を載せられたい方は、お手数ではありますが2016年12月22日までにトロント仏教会の事務までこちらの用紙と共にお布施を添えていただくようお願い申し上げます。

Please print my/our name(s) under ‘New Year Greetings’ in the upcoming January 2017 issue of the GUIDING LIGHT.

2017年度における佛心“新年のご挨拶”に名前が記載されることを希望します。

氏名: _____

住所: _____

(N.B. Phone requests will NOT be accepted.)
(お電話での受付はいたしておりません)

佛心

二〇一六年

十二月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

悲しみの中にもよろこびが



もちろん、この世で会えなくなつた悲しみは、深く大きいのです。けれども、（親鸞聖人は）念仏の仲間が迷いの世界に沈んでいくのではなく、仏さまの世界に生まれてゆかれたという意味では、こころに自然と湧き上がってくる悲しみのなかにも、よろこぶべきものだということを、「めでたきこと」という言葉で表されたのです。

（二十四代目御門主様“朝には紅顔ありて”より）

月も十二月となり、今年も一年の終わりを迎えようとしています。私事ではありますが、この二千十六年は私にとつて大きな変化を感じる年でした。

と言いますのも、六年間お世話になつた関西を出て、ここカナダのトロント仏教会でお勤めをさせてもらえる年となつたからです。

皆さんは、この一年間を振り返るとどのような年だつたでしょうか。楽しかったこと、嬉しかったこと、と同時に寂しかったことや苦しかったことも思い浮かんでくるとは思いませんか。

私は仕事柄、葬儀などの法要で人との別れの儀礼に立ち会うことが多い身であります。大切な人を亡くされた遺族や友人の方の姿を目の前にしますと、どうしても悲しい気持ちを待たずにはいられません。特にその悲しい気持ちになるのは、儀礼の時よりも葬儀の打ち合わせをしていく際に、遺族から亡くなつた方の思い出を話してもらうときです。

その思い出話では、「お母さんは厳しい人だった」「お父さんは頑固者だった」などを一つの話題として笑顔で話してくれます。しかし、その後には多くの方が「それでも誰よりも優しい人だった。」と涙を浮かべて、想いを口から出してくれます。

その時のさびしさの雰囲気というものは、なかなか言葉では表せないものです。ただ、その涙と同時に遺族の方から微笑みが出てくるのも確かです。

それは、時に厳しく時に優しくなつた大切な人にもう触れることのできない悲しみと、改めてその人と出遇えてどんなに自分は幸せだったかという喜びが複雑に交錯する時間であるからです。

私自身、このような貴重な時間を僧侶として共に居させてもらっている事を考えますと、なんとも有り難いことだと感じます。

そんな時、ある方が「ただ、もうあの人とは合えないからなあ。」とつぶやいたのを耳にしたことがあります。大切な人を亡くなつてしまうと私たちはもうその人と会うことはできないのでしょうか。